



「レズビアン」という生き方 キリスト教の異性愛主義を問う

堀江有里著, 新教出版社, 2006年 評者: 田中 杏子

「異性愛主義という枠組みからみた同性愛、男性中心主義という枠組みからみた女性。その二つが交差したところに、レズビアンは存在する」と著者の堀江有里氏はいう。実際、「レズビアン」という存在は、フェミニズムの内部でさえ、「同じ女」として不可視のものとして「回収」されるか、あるいは他者化されて排除されてきたという経緯がある。

本書は、そうした性差別、同性愛者差別の構造を生み出し、再生産し続ける枠組みへの抵抗運動を、理論的に、実践的に担ってきた著者の、「たたかい」のただなかの記録である。

第1部「『レズビアン』というポジション」では、ジェンダー研究に関わったことがある人には馴染みのある18のキーワード（「クローゼット」「カミングアウト」「クィア」等々）について、語の成立した歴史的背景や学問の意味が紹介されている。また、本書の特徴は、「レズビアン」という名づけを引き受けた著者の生活のなかで、これらのキーワードがどのような実感をもって捉えられ、生きられているのかを具体的に知ることができるという点にある。さらに著者は、異性愛主義というひとつのイデオロギー装置は、そこから排除された人々に暴力を行って来たという歴史があることから、異性愛特権へ斬り込んでいく。それによって、「正しいセクシュアリティ」を特権化するマジョリティの位置性を問うだけでなく、「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律（GID特例法）」や同性婚といった、マイノリティが主体となって社会的に承認を求めていく動きの陥穽までも、精確に衝いた論を展開する。

第2部「キリスト教と同性愛者差別——“たたかい”の現場から」では、キリスト教（日本基督教団）のなかで起こった「同性愛者差別事件」に対し、教団内の人々がどのように闘ってきたのかが詳細に描かれる。著者はここで、「対話拒否」という教団執行部の姿勢に抵抗する方法として、「抹消されてしまうのであれば、せめて痕跡を残していく」という手段をとる。そのため、本文および注釈には「事件」周辺の日付や、総会に提出された議案名、関わった人物の名前などが書き込まれ、現場のレポートらしい臨場感を伴って、迫力のある内容となっている。だが、少なくとも本書のなかでは、差別を生み出す構造を問う人々の声を聞きとって誠実に応える声はなく、ここに問題の深刻さ（＜絶望的＞な状況）が浮き彫りになる。

本書の全体を通して印象的なのは、差異を抹消したところに築かれる連帯や繋がり、それに少しでも似通ってしまうような関係性への、著者の透徹した懐疑である。一例を挙げれば、「同性愛者差別事件」を問題化した中心人物たちが、長年、教団内で性差別 [=女性差別] 問題に取り組んできた女性たちだったことを明らかにしつつも、抵抗運動の最中に“女たち”のあいだに生じた「温もり」を描くことに、著者はあくまでも躊躇する。

本書において、著者が「レズビアン」という名づけを引き受け、引き受け続けるということは、マジョリティのみならず、時には身近なマイノリティと相対するときも「問う」というスタイルを崩さず、他者とのあいだに存在する差異を具体的に見つめ、そこに留まる思考そのもの——「生き方」のことであるのだろう。こうした峻厳な「生き方」から発せられる問いかけに、読み手としての“わたし”は、＜いま—ここ＞でどのような属性を選択し、引き受け続けている人間として応えていくことができるのだろうか、深く考えさせられる一冊だった。

(ジェンダーフォーラム事務局)



Gemとは…光り輝く宝石。Gender Encountering at Mitchellを表します。「ミッチェル館でのジェンダーの出会い」の意です。

2011年度 ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金 授与者決定!

ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金は、固定的な性別役割分業観にとらわれない視点にたつて、男女共同参画社会の実現に寄与するための活動・研究をした、あるいは活動・研究を計画している立教大学の学部および大学院に在籍する学生(個人・団体)を幅広く対象とし、2000年度から募集を始めた奨学金です。2011年度は(A)ジェンダーフォーラム『年報』掲載論文:2件、(B)活動・研究奨励金:6件の応募があり、2011年11月17日に開催された選考委員会において、1件に奨学金を授与することを決定いたしました。また、授与者には、同年12月5日に開催された授与式にて、新田啓子所長より奨学金が授与されました。選考結果は下記のとおりです。

ロザリー・レナード・ミッチェル 記念奨学金選考結果

A ジェンダーフォーラム『年報』掲載論文

奨学生氏名: 中田 麻理
(文学研究科フランス文学専攻博士課程前期課程1年)
タイトル: 『花のノートルダム』における聖性と女性性
支給額: 50,000円

B 活動・研究奨励金

該当者なし

※中面に講評を掲載しました。是非ご覧ください。



受賞者の言葉

ミッチェル記念奨学金の掲載論文に採用されたことを大変光栄に思います。今後とも努力を続けていきたいです。



案内図



立教大学ジェンダーフォーラム

開室日: 毎週月曜日～金曜日
開室時間: 10:00～16:00(月火木金) 13:00～18:00(水)
場所: 立教大学池袋キャンパス ミッチェル館1階
TEL&FAX: 03-3985-2307
E-mail: gender@rikkyo.ac.jp
URL: http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/

詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板またはHPでご覧ください。



2011 年度「ミッチェル奨学金」選考を終えて

ジェンダーフォーラム所長・新田啓子

例年、奨学生を募集しているロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金ですが、2011年度は久々に、論文部門への応募者から、受賞者を出すことができました。本奨学金制度では、「論文」と「活動」の二部門において選考を行っておりますが、近年では両カテゴリーともに多くの応募者がありながら受賞者が出ていませんでしたので、これは喜ばしい結果です。

受賞者、中田麻理さんの論文「『花のノートルダム』における聖性と女性性」は、ご本人の専門、フランス文学研究の方法論に立脚しつつ、ジャン・ジュネ最初の小説をジェンダーの分析軸から丁寧に読み解いた点が評価されました。同小説を含めたジュネの作品においては、「男性同性愛」や「男娼」の表象が分析対象となってきましたが、中田さんはそこに、聖性と汚辱、さらにはそれらを引き受けてきたことが世界中の文学体系において検証されている「女性性」の形象が、複雑に絡み合っているさまを明らかにしたのです。論文としては荒削りな点も指摘されましたが、大変に気迫のこもった作品であり、さらに完成度の高い研究に結びつくであろう将来性が評価されました。

2011年度の実績者は、論文部門2名、活動部門6名でした。昨年度に引き続き、多くの応募があった活動部門では、審査員から高い評価を受けた研究もありましたが、残念ながら受賞にはいたりませんでした。主な理由は、①申請されたプロジェクトが、ジェンダーと有意に結びついていない、②申請者が、提出してきたプロジェクトに本当に取り組んでいる様子が感じられない、③プロジェクト自体が思いつきで準備不足である、というものです。

特に活動部門は、まだ結果が出ていない研究に「投資」をするという趣旨をもつカテゴリーでありますから、そのことを十分に理解のうえ準備してください。2012年度は、スリリングかつ地に足の着いた研究計画書を読めることを期待しています。また、論文部門については、2011年度『ジェンダーフォーラム年報』にて、前述の受賞論文を読むことができます。参考にしてください。執筆者それぞれが追究する学問分野の基本を抑えた、専門的深まりのある研究成果をお待ちしています。

第53回 ジェンダーセッション(2011年11月10日(木))

**「レズビアン」の視点からキリスト教を読む
—異性愛主義との〈闘争〉と〈連帯〉の可能性—**

話題提供：堀江 有里 氏(日本基督教団・牧師[京都教区]、立命館大学ほか兼任講師)

キリスト教が同性愛を受け入れるかどうかについては、アメリカでは長い間拮抗した議論が続けられてきた。同性愛者の牧師を認めるか否かで、放火事件や逮捕者が何十人も出るほどの大事件に至ったこともある。日本においても、ゲイ男性の受堅者を認めない発言や、レズビアン牧師の講演会拒否などが問題化している。差別とは、人間が「差別」として問題化することで初めて認識される事からである。

キリスト教における同性愛者差別の前に立ちはだかる問題は、異性愛主義という男女の対の結びつきへの意識が深く関係している。たとえば、近代以降の制度である結婚を、神によって人類が創造された当初から定められたものであるとして、「神の言葉」をとりつづ者、つまり男性聖職者によって聖性を付与されるといったことだ。このようなコンテクストにおける、レズビアンとは何であるかというのが今回のセッションであった。

女／男というジェンダー、そして同性愛／異性愛というセクシュアリティのなかで、「あたりまえ」とされている「男」「異性愛」からはずれた軸としてのレズビアンは、絶えず周縁におかれる見えないものとされている。一方でその流動性は、彼らを偏見のない自由な人間にするという面も持つ。しかしながら周囲への共通性の稀薄さが強調されれば、集団から排除されてしまいがちである。

差別撤廃に向けての社会運動として、まず政策提言が挙げられるが、異性愛主義の規範に乗らない限り、権利要求はできないという問題がある。そこで注目すべきなのは、その規範を根源的に問うていく方法である。これは、いままで異性愛主義の規範のなかで育ち、築き上げられてきた自己を、足元から崩しかねない危険にみちた作業だ。だがこの基盤を崩すことで、今まで見えないものにさせられてきたレズビアンやゲイ、またフェミニズムなどさまざまな問題の解決へ確実な一歩を踏み出すことができるはずだ。

高岡 かさね (立教大学大学院文学研究科博士課程前期課程)

第54回 ジェンダーセッション(2011年12月1日(木))

**「マスキュリニティの束縛からの解放：
ドゥルシラ・コーネルの議論を手がかりにして」**

話題提供：綾部 六郎 氏(同志社大学法学部助教)

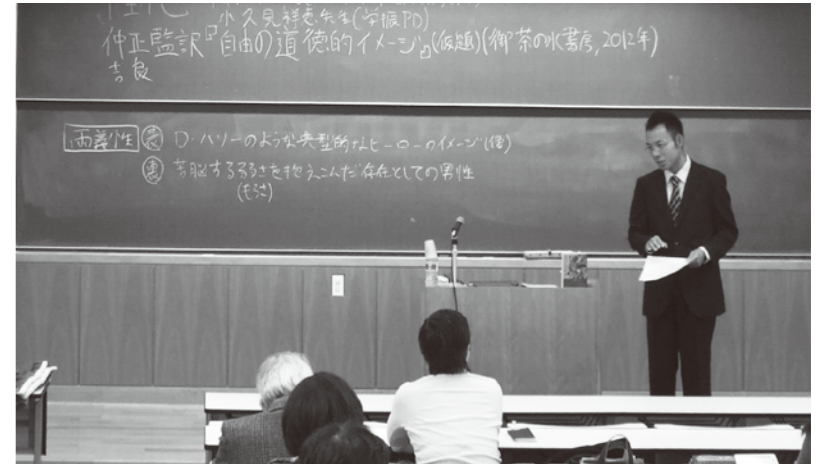
あらゆる社会関係を認識する際に作用する「性差」という観念は、いかに構築されてきたか——それを系譜学的に分析しつつ、その観念が惹き起こす問題を明らかにしてきたジェンダー論に、法哲学者が斬り込むようになって久しい。今回プレゼンテーションを行った綾部六郎氏も、そうした論脈を活性化する気鋭の研究者である。

氏が選んだテーマは「マスキュリニティ」。このジェンダーセッションでも、常にリクエストの多い話題である。セッション当日も、いつにも増して多数の男性オーディエンスが集まって、女性オーディエンスとともに、氷雨が降る寒い冬の夜、活発な議論を繰り広げた。

この会で綾部氏は、米国の法哲学者・ジェンダー理論家として名高いドゥルシラ・コーネルが提示する「マスキュリニティからの解放の方途」を、わかりやすく解説したとあってよかろう。フェミニズムが「ジェンダー化された主体」としての「女性」を見いだしたとき、普遍的人間 (man) として権威を付与されながら、やはりジェンダーをもつ限定的存在に過ぎなかった「男性」への批判的視点はすでに生まれていた。近年の日本でも、とりわけ産業構造の変化によって変容を強いられる「男性的立場」の困難を実感する人が少なくなく、男性自身がマスキュリニティの観念から解放されることの重要性に対する意識は、確実に広がっていると思われる。

綾部氏は、ラカン派精神分析理論など、コーネルがよく使う概念装置を解説した後、彼女が著書『イーストウッドの男たち マスキュリニティの表象分析』で扱うクリント・イーストウッド監督作品『ミスティック・リバー』(2003)を素材として、話を進めた。氏によれば、コーネルは、同作品が「脆さ」を内包する男性登場人物を描いていることの画期性を、高く評価しているとのこと。かつてイーストウッドが、西部劇や『ダーティ・ハリー』シリーズ等で、ラフでタフな無頼派ヒーローをハードに演じていたことを知る者は、確かに監督としての彼が描く、男性登場人物の陰影に興味を持たずにはいられない。その意味で、コーネルはよい対象を見つけたものだと感じ入った。

だがそのいっぽうで、一方向のみの「教訓」には収斂していかないのが表象の面白さでもある。ましてや映画は、制作過程に多数の人間が加わるもので、スクリーンに映じられたものの構造も複雑だ。討議でも、コーネルの解釈そのものに反論が示されたりもして、文学表象を専門とする私には、その対話の過程こそが興味深く感じられた。コーネルの同著書は、2011年に日本語訳も刊行され、綾部先生ご自身も翻訳チームに名を連ねている。帰宅した後、早速アマゾンで同訳書を注文したことは言うまでもない。



新田 啓子 (文学部教授)